TADOKU JUNIOR　ピノッキオの冒険　★★★☆☆ ふつう　655語

Pinocchio, Chapter 5

第5章　たまごから飛び出したヒヨコ

Carlo Collodi (tr. Carol Della Chiesa, 1909)（1883年の本）　原文そのまま　朗読：Mark F. Smith

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　おなかがぺこぺこのピノッキオ。やっと見つけたたまごを焼いて食べようとしますが、からをわると……！ごちそうはどこへ？



Pinocchio is hungry and looks for an egg to cook himself an omelet; but, to his surprise, the omelet flies out of the window.

If the Cricket's death scared Pinocchio at all, it was only for a very few moments. For, as night came on, a queer, empty feeling at the pit of his stomach reminded the Marionette that he had eaten nothing as yet.

A boy's appetite grows very fast, and in a few moments the queer, empty feeling had become hunger, and the hunger grew bigger and bigger, until soon he was as ravenous as a bear.

Poor Pinocchio ran to the fireplace where the pot was boiling and stretched out his hand to take the cover off, but to his amazement the pot was only painted!

Think how he felt! His long nose became at least two inches longer.

He ran about the room, dug in all the boxes and drawers, and even looked under the bed in search of a piece of bread, hard though it might be, or a cookie, or perhaps a bit of fish. A bone left by a dog would have tasted good to him! But he found nothing.

And meanwhile his hunger grew and grew. The only relief poor Pinocchio had was to yawn; and he certainly did yawn, such a big yawn that his mouth stretched out to the tips of his ears. Soon he became dizzy and faint. He wept and wailed to himself: "The Talking Cricket was right. It was wrong of me to disobey Father and to run away from home. If he were here now, I wouldn't be so hungry! Oh, how horrible it is to be hungry!"

Suddenly, he saw, among the sweepings in a corner, something round and white that looked very much like a hen's egg. In a jiffy he pounced upon it. It was an egg.

The Marionette's joy knew no bounds. It is impossible to describe it, you must picture it to yourself. Certain that he was dreaming, he turned the egg over and over in his hands, fondled it, kissed it, and talked to it:

"And now, how shall I cook you? Shall I make an omelet? No, it is better to fry you in a pan! Or shall I drink you? No, the best way is to fry you in the pan. You will taste better."

No sooner said than done. He placed a little pan over a foot warmer full of hot coals. In the pan, instead of oil or butter, he poured a little water. As soon as the water started to boil—tac!—he broke the eggshell. But in place of the white and the yolk of the egg, a little yellow Chick, fluffy and gay and smiling, escaped from it. Bowing politely to Pinocchio, he said to him:

"Many, many thanks, indeed, Mr. Pinocchio, for having saved me the trouble of breaking my shell! Good-by and good luck to you and remember me to the

family!”

With these words he spread out his wings and, darting to the open window, he flew away into space till he was out of sight.

The poor Marionette stood as if turned to stone, with wide eyes, open mouth, and the empty halves of the egg-shell in his hands. When he came to himself, he began to cry and shriek at the top of his lungs, stamping his feet on the ground and wailing all the while:

“The Talking Cricket was right! If I had not run away from home and if Father were here now, I should not be dying of hunger. Oh, how horrible it is to be hungry!”

And as his stomach kept grumbling more than ever and he had nothing to quiet it with, he thought of going out for a walk to the near-by village, in the hope of finding some charitable person who might give him a bit of bread.

おなかをすかせたピノッキオは、オムレツを作ろうとたまごをさがします。ところがおどろいたことに、オムレツは窓から飛んでいってしまいます。

コオロギが死んで、ピノッキオがこわいと思ったとしても、それはほんのしばらくのあいだだけでした。というのも、夜になると、おなかのそこのほうになんだか変な、からっぽな感じがして、まだ何も食べていないことを思い出させたからです。

男の子の食欲はみるみる大きくなるもので、しばらくすると、その変なからっぽの感じはおなかがすいた感じになり、それがどんどんふくらんで、まもなくクマのようにはらぺこになりました。

かわいそうなピノッキオは、なべがにえているだんろにかけよって、手をのばしてふたをとろうとしました。ところがびっくり、なべはかいてあるだけの絵だったのです！どんな気持ちだったか、考えてもみてください！長い鼻が、少なくとも5センチはのびました。

部屋の中をかけ回り、箱や引き出しを全部かき回し、ベッドの下までのぞいて、かたくてもいいからパンのかけらか、クッキーか、魚のきれはしでもないかとさがしました。犬の食べ残した骨でさえ、おいしく思えたことでしょう！でも、何も見つかりませんでした。

そのあいだにも、おなかはどんどんすいていきました。かわいそうなピノッキオにできることといったら、あくびをすることだけでした。そしてたしかに大あくびをしました。口が耳のはしまでとどくほどの大あくびです。まもなく、目が回って、ふらふらになりました。ピノッキオは泣きながら、ひとりでなげきました。「もの言うコオロギの言ったとおりだ。お父さんの言うことを聞かずに家出したのは、悪かった。お父さんがここにいたら、こんなにおなかがすくこともなかったのに！ああ、おなかがすくって、なんてつらいんだろう！」

ふと見ると、部屋のすみのごみの中に、めんどりのたまごによくにた、丸くて白いものがありました。ピノッキオはあっというまに、それに飛びつきました。たまごでした。

あやつり人形のうれしさといったら、きりがありませんでした。とてもことばでは言いあらわせません。自分で思いうかべてみてください。夢を見ているにちがいないと思いながら、ピノッキオはたまごを手の中で何度もひっくり返し、なでたり、キスしたり、話しかけたりしました。

「さあて、きみをどうやって料理しようかな？オムレツにしようか？いや、フライパンで焼くほうがいいな！それとも、飲んじゃおうか？いや、いちばんいいのはフライパンで焼くことだ。そのほうがおいしいもんね。」

言うが早いか、さっそくとりかかりました。炭火がいっぱい入った足あたため用の火ばちの上に、小さなフライパンをのせました。フライパンには、油やバターのかわりに、水を少し入れました。お湯がわきはじめたとたん――パカッ！――からをわりました。ところが、白身と黄身のかわりに、ふわふわで元気いっぱい、にこにこした小さな黄色いヒヨコが飛び出してきたのです。ヒヨコはピノッキオにていねいにおじぎをして、言いました。

「ピノッキオさん、ぼくのからをわる手間をはぶいてくださって、本当に本当にありがとうございました！さようなら、お元気で。ご家族のみなさんによろしく！」

そう言うと、ヒヨコはつばさを広げて、開いていた窓へさっと飛んでいき、空のかなたへ見えなくなるまで飛んでいってしまいました。

かわいそうなあやつり人形は、石になったように立ちつくしました。目をまるくして、口をぽかんと開け、手にはからっぽのたまごのからを二つ持ったままでした。我に返ると、ピノッキオは声をかぎりに泣きさけびはじめ、足をドンドンふみならしながら、なげきつづけました。

「もの言うコオロギの言ったとおりだ！家出なんかしなければ、そしてお父さんがここにいれば、おなかがすいて死にそうになることなんかなかったのに。ああ、おなかがすくって、なんてつらいんだろう！」

そして、おなかはますますグーグー鳴るのに、だまらせるものが何もなかったので、ピノッキオは近くの村まで出かけてみようと思いました。だれか親切な人がパンをひとかけらくれるかもしれないと思ったのです。

たんご と クイズ　第5章　たまごから飛び出したヒヨコ

bread パン	**bone** 骨	**hungry** おなかがすいた
egg たまご	**omelet** オムレツ	**pan** フライパン
Chick ヒヨコ	**wings** つばさ	

Q1 ピノッキオがふたをとろうとしたなべは、本当は？

① からっぽだった　② 絵にかいたものだった　③ こわれていた

Q2 たまごをわったら、何が出てきた？

① 小さな黄色いヒヨコ　② 黄身と白身　③ 小さなヘビ

Q3 ピノッキオは最後に、どこへ行こうと思った？

① 学校　② 森　③ 近くの村

こたえ

Q1 ②　だんろのなべは、かべにかいてあるだけの絵でした。ピノッキオはがっかりして、鼻がまたのびてしまいました。

Q2 ①　白身と黄身のかわりに、ふわふわの黄色いヒヨコが出てきて、お礼を言って窓から飛んでいきました。

Q3 ③　親切な人がパンをくれるかもしれないと思って、近くの村まで出かけてみることにしました。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #500（Carlo Collodi (tr. Carol Della Chiesa, 1909)、1883年）。パブリックドメイン。

挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。

朗読（Web版）：Mark F. Smith（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）

和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。